

中国先史・古代における稲作社会の多元的形成の研究 —主に博物館・文物考古研究所所蔵の農耕関連遺物調査報告—

槇林 啓介

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター講師 / 国際文化資源学研究センター客員研究員

1. 調査の目的

先史・古代における稲作化および稲作社会の形成については、主に稲遺存体資料の分析から一元的な形成過程のモデルが考えられてきた。本研究はこれを打開し、東アジアにおける稲作社会の多元的形成過程を解明するための研究の一環である。そこで、昨今盛んに進められている稲遺存体などの自然遺物から構築した農耕論だけでなく、農耕具などの農耕技術を表す栽培体系から構築する農耕論も相互に進めていく必要があるとし、栽培体系からみた長江流域とその地域社会について検討する。当派遣では、対象地域の文物考古研究所や博物館を訪問し、そのための基礎的な資料把握を目的とした。

筆者は、以前に栽培体系に関わる耕作用具と収穫具の組成とその変遷を地域ごとに分析をしたことがある。その結果、少なくとも長江下流域と長江中流域との二つに独自の栽培体系が存在することを指摘した（図1）。これらの栽培体系の形成と伝播をより具体的に解明することで、多元的な稲作社会の形成にも迫れると考えている。

そこで、今回の対象地域は主に長江下流域（浙江省

域）を中心とし、比較を行うために長江中流域（湖南省域）、長江上流域（成都市域）、華南（広東・香港）も対象とした。

2. 資料調査の射程と訪問先

日本の文化財行政機関や研究機関では、ある考古資料について申請をすれば、基本的には全資料を閲覧することができる。これは、文化財が人類共有の財産として法的にも認められているだけでなく、こと研究手順に関する方法論が共有されていることが背景にある。それは、ある資料について研究するときには、その資料をできる限りすべて実見することを前提にしていることである。いわゆる実証主義的な方法論である。すべての考古資料の実測等をして「資料化」することで、分類に客観性を担保するのである。そのために、発掘調査報告書に掲載されなかったものも含めて、各機関に収蔵されている資料の閲覧を申請し、各機関側もその目的を了解しているためにできるかぎりの資料の閲覧を許可する。日本ではこうした手順が共有されている。

いっぽう、中国の考古学では、当該研究者が考古資

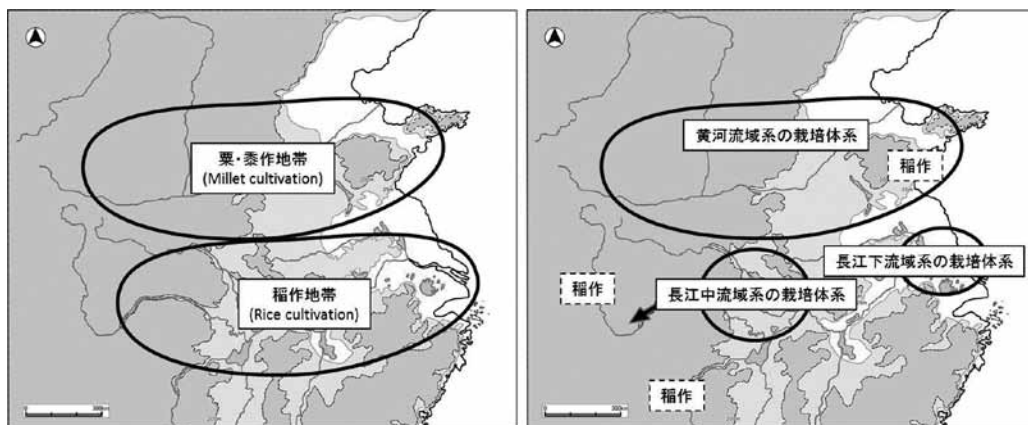


図1 穀物遺存体からの農耕区分と栽培体系からの農耕区分（槇林 2008 を改変）

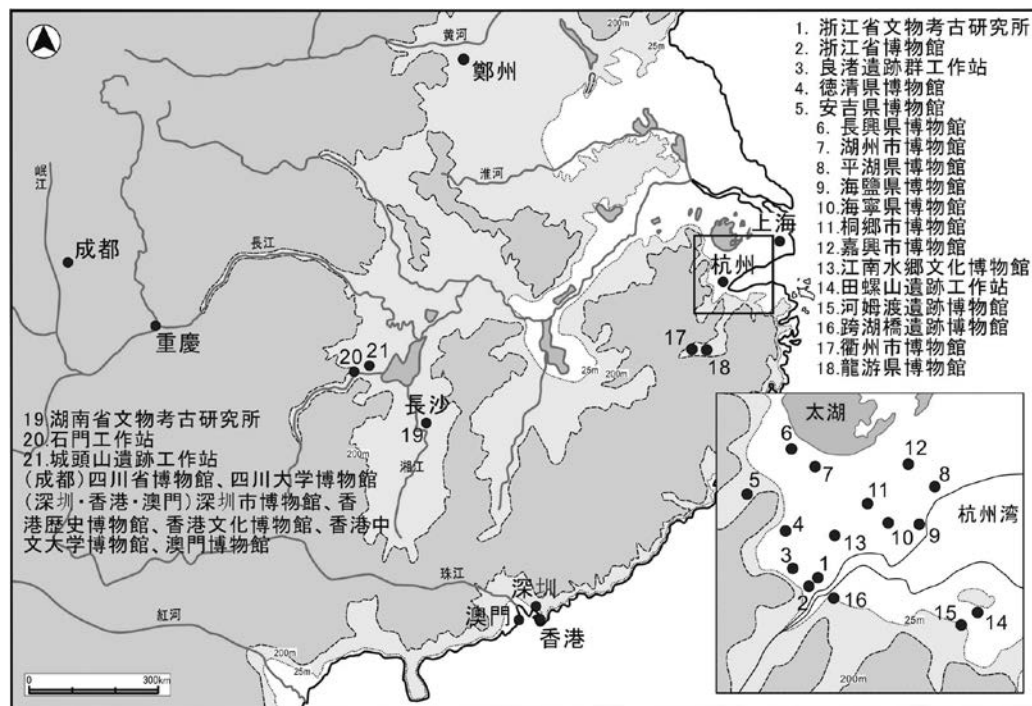


図2 本報告に関わる主な訪問調査先一覧

料を実測等をし「資料化」して、分類をするという手順がそもそも稀薄である。それは、発掘調査から報告書出版、そして研究論文の執筆にいたる過程で分業が体制化されていることや研究手法に前述のような実証主義的な方法論が重視されていないことなどが要因としてある。さらに、外国人研究者に対する法律上の制限も加わる。

以前から、こうした方法論上の相違と研究環境における現状について、様々な問題点を抱えていた。とくにすべてを実見することが難しいという現実がある。資料を実見することから始めることで、研究現状の確認とその問題点、そして新たな研究目的という基本的な手順が得られると考えている日本の研究者にとっては、研究方法を修正せざるを得ない状況も多々あると思われる。とはいえ、国によって文化財行政や研究環境も異なるのは当然であり、そのなかで最善の方法を探すべきであろう。

このような現状と問題意識のもと、今回の派遣では比較的長期の派遣期間を利用して、できるかぎりすべての研究機関をめぐり、資料を実見し基礎的な資料を把握することを大きな目的の一つに据えた。その意味は、まんべんなく訪問することで、出土したすべての資料の存在を「できるかぎり」掌握することにつながると考えたからである。

派遣の研究目的のひとつに掲げる長江下流域の農耕

関連遺物の研究を達成するために、浙江省管内に絞り、訪問と資料の実見を行った。訪問機関は以下のとおりである(図2)。浙江省北部：浙江省文物考古研究所良渚遺跡群工作站、同研究所玉架山工作站、浙江省博物館、德清県博物館、安吉県博物館、長興県博物館、湖州市博物館、平湖県博物館、海鹽県博物館、海寧県博物館、桐郷市博物館、中国江南水郷文化博物館(杭州市余杭区)。浙江省中部：浙江省文物考古研究所田螺山遺跡工作站、同研究所荷花遺跡工作站、跨湖橋遺跡博物館。浙江省南部：衢州市博物館、龍游県博物館。筆者はこれまでに、浙江省北部では、嘉興市博物館、同中部では、寧波市博物館、河姆渡遺跡博物館、同東南部では、温州市博物館にも訪問していることを考慮して、以上のような訪問先を決めた。浙江省南部を除く、ほぼ省内の研究機関をカバーしたことになる。浙江省に隣接する同じ長江下流域に属する上海市、江蘇省南部、安徽省東部にはまだ未訪問の機関が多くあるが、本派遣期間では浙江省管内の把握を優先した。

同様に、長江中流域については湖南省文物考古研究所の展示室収蔵庫を中心に、同研究所石門工作站、同研究所城頭山遺跡工作站を訪問した。また、ほかに、長江中流域と華南との関係を調べるために、同省南部の湘江流域にも訪問する予定でいた。各文物管理处や博物館に問い合わせたところ、良好な資料がない等の回答があり、湖南省文物考古研究所所蔵の湘江流域の

資料を中心に実見した。良好な考古資料が少ないとしても、将来的には遺跡踏査の機会を得たいと考えている。

長江上流域（四川盆地）においては、時間的制約があったため、主に四川大学および成都市文物考古研究所が所管する考古資料と四川における研究現状を把握することに留めた。訪問先は以下のとおりである。四川省博物館、金沙遺跡博物館、三星堆遺跡博物館、武侯祠博物館、成都市文物考古研究所宝墩遺跡工作站、郫县古城、蒲江县文物管理处、雅安県文物管理处。

さらに、長江流域からの影響を確認するために、広東・香港に訪問する機会を作り、深圳市博物館、香港歴史博物館、香港文化博物館、澳門博物館の関連資料を実見した。

派遣期間は、2012年11月5日～2013年1月8日まで、浙江省文物考古研究所を拠点として、上記の研究機関等を訪問し調査を行った。このほか、遺跡踏査も行っている。

現地では、浙江省文物考古研究所の李小寧所長、孫国平研究員をはじめ、湖南省文物考古研究所の袁家栄元所長、顧海濱副所長、莫林恒副研究員、四川大学の李映福教授、香港中文大学の鄧聡教授、そして各訪問研究機関の担当の方々にお世話になった。とくに、孫国平氏には受入れ責任者になっていただき、各研究機関への照会から生活一般までお世話になった。心から感謝を申し上げたい。

3. 調査成果の概要

長江の各地域で営まれた新石器時代の稲作とその技術体系に関わる道具について、まず出土資料の現状を把握することができた。訪問調査先は、前述の研究機関である。収蔵の農耕関連遺物を中心に実見をした。時間的制約がある場合には、主に耕作具と収穫具を優先して見せていただいた。ここでは、いくつかの問題点を指摘しながら、成果と展望を報告する。なお、先方機関の要請により所蔵遺物の写真等の公表はできないため、本報告でも掲載はしない。

長江下流域

浙江省内の研究所とその工作站および博物館を訪問し、関連資料を閲覧した。博物館所蔵の資料は、展示室に展示されているもの以外は収蔵庫に保管されており、基本的には実見することができない。今回は、長

興県博物館、平湖県博物館、海鹽県博物館、海寧県博物館、桐郷市博物館、龍游県博物館で実見を許可していただいた。また、浙江省文物考古研究所の田螺山遺跡工作站、良渚遺跡群工作站でも整理中の遺物を実見する機会を得た。実測等の記録はできないが、ほとんどの博物館・工作站でメモ写真での記録を許していただいた。

本報告では、いくつか絞って報告する。まず、石包丁と石鎌および耘田器をめぐる問題である。石包丁や石鎌は、稲作の収穫具として早くから認識されている考古遺物である。我が国においても、弥生時代の基本的な収穫具が石包丁であることからその由来を探る研究が盛んに行われてきた。

長江下流域では、崧沢文化になって、石包丁と石鎌が出現し、その後良渚文化期、馬橋文化期では、石包丁と石鎌は普遍的になるとされている。しかし、筆者は石包丁に関して、崧沢文化や良渚文化の遺跡から確実に出土したとされる資料が少ないことを問題視していた。今回の訪問調査では、やはり良渚文化に属する石包丁は少なく、崧沢文化にいたっては確認することができなかった。また、現地研究者との議論でも、新石器時代における石包丁の存在に否定的な意見が多かった。こうした議論が起こる背景には、おそらく発掘調査時における出土文化層の認定の方法や石包丁が新石器時代の収穫具としてすでに黄河流域で認識されているなどの先行研究があるのかもしれない。長江下流域における石包丁の年代について、崧沢文化だけでなく、良渚文化も含めて再度検証する必要がある。

また、石鎌についても課題を見出した。筆者は以前に、中国先史の鎌を、刃が柄に鈍角に装着する鈍角鎌と直角に装着する直角鎌に分類したことがある（楨林2007）。鈍角鎌は、黄河中流域一帯の裴李崗文化に存在した鎌が相当する。裴李崗文化の鎌（鈍角鎌）と新石器時代中期後半以降に盛行した直角鎌とでは出現や系統が異なるとし、区別して考えるべきと主張した。裴李崗文化の鈍角鎌は仰韶文化に移行するころには消滅して、石包丁などの穂摘具に取って替わる。その後、黄河流域では龍山文化の時代に新たに直角鎌が出現し普遍化すると想定した。この直角鎌は長江下流域でも、とくに良渚文化の遺跡で常見されるものである。こうした観点で鎌を見た場合、石鎌は新石器時代早期から連綿と存在したものではなく、二つの系統があることになる。そこで、長江下流域の石鎌に焦点をあてて、今回も観察した。

観察できた石鎌はすべて直角鎌に相当することがわかった。基本的に丁寧に成形されており、基部には柄に装着するための突起やえぐりが施されている。こうした部位も基準にすることで、より明瞭な分類ができると期待される。現在、長江下流域で最も古い石鎌は、浙江省南河浜遺跡出土のもの（浙江省文物考古研究所 2005）で、時期は崧沢文化期である。分類を行い型式変化から出土時期を再検討することで、崧沢文化期に遡る直角鎌の事例が増える可能性がある。また、良渚文化衰退後の馬橋文化でも直角鎌が多く出土しており、継続して普遍的に使用されていることが分かる。しかし、馬橋文化以降は、半月形石包丁も盛行し始めており、新石器時代から古代にかけての資料を整理する必要がある。

加えて、直角鎌は石戈との関係にも注意する必要がある。長興県博物館所蔵石器に、両者の密接な関係を想起させる資料がある。ここでは、写真の掲載はできないことを再度お断りしておく。遺物の多くには、「長港」や「洪港」という地名の記載がある。それらが具体的に長興県のどこかは確認できないが、工場等の開発中に多くの遺物が出土したとのことである。発掘調査が行われた遺跡もあり、小浦鎮画溪橋遺跡と同鎮台基山遺跡が確認できた。石器の種類は豊富で、農耕具に関するものには石包丁（外湾半月形、直背半月形、長方形）、石鎌、破土器、犁がある。いずれにも数十点を数え良好な資料ばかりであるが、上記の2遺跡以外はすべて採集品である。これら資料は、一見新石器時代の遺物と思われたが、当該博物館では石戈が共伴していることから、時期は主に馬橋文化以降を考えているようである。逆に石戈が伴っていなかったら、すべての石器を新石器時代に認定していたとのことである。石戈は、基部が矩形に成形されており、刃部との境には上部に明瞭な突起、下部にはえぐりが施されている。直角鎌も基部が矩形を呈し、刃部との境には、上部では突起はないものの明瞭に段をつけ、下部では石戈同様にえぐりを施している。刃部は両方ともに片刃である。これらの点から、同時期のものとして問題ない。また、長興県博物館所蔵の石戈は、浙江省安吉県大樹墩遺跡の石戈（浙江省文物考古研究所 2009）と形態的には類似していることも指摘できる。大樹墩遺跡の時期は殷代併行期とされている。今後、良渚文化の直角鎌が馬橋文化以降どのように変化するのか、改めて検討していきたい。

耘田器の問題も若干記しておく。耘田器は、以前は

耕作具と考えられていたが、使用痕分析の結果、穂摘具の可能性が指摘されている（原田 2011）。今回は詳細に使用痕跡の観察をすることはできなかったが、実見できたものに限っては、刃部に直交もしくはやや斜めに残る擦痕を確認した。耘田器には上部に有孔のものがある。指を通したり、縄を括り付けたりしたと想定されるが、明瞭な擦痕は観察できなかった。高倍率の観察が求められる。耘田器が穂摘具とすると、出土数も問題にする必要がある。発掘調査が行われた良渚文化の遺跡のほとんどは墓地であり、現在までに集落遺跡から大量に出土したという報告はない。また農耕具の石器製作遺跡も見つかっていない。最後に用語の問題を指摘したい。耘田器は、石刀（石包丁）、石耜冠として展示・報告されることがある。上部の突起が強調される場合には、徳清県博物館所蔵のもののように石耜冠の名称が使用される。石刀（石包丁）と報告されているなかには、背部中央が僅かに突き出るものがあつた。耘田器の突起が退化したものとみることができ、また石器全体の形状がわずかに弧状を呈していることから、耘田器の範疇に入れるべきと考えられる。そうすると、器種認定が石刀（石包丁）から耘田器に変わることになる。おそらく、このような器種認定に関わる問題がほかでも存在すると思われる。

このように、収穫具だけでも時期決定や器種認定に問題があることが認識できる。課題として、新石器時代だけでなく古代の少なくとも金属製品に置き換わるまでの資料を集成し、分類を再検討することが求められる。その際、報告書の図面と可能な限り比較しながら進め、全体かつ細部の形状を確認することでより正確な分類につなげることが望まれる。このことは、収穫具だけでなく、石鎌や破土器と呼ばれる耕作具にもあてはめられる。また、桐郷市博物館所蔵のものには、石鋤と認定している石鎌状の石器がある。柄が刃部に直立しており刃部も直線であることから石鋤もしくは石鎌と認定しているようである。また江南水郷博物館では、同形態の石器を有肩石刀と呼称している。これらを破土器の一型式としている研究（小柳 1997）もあり、同一器種なのか、異なる器種にすべきか問題がある。器種認定に関わる研究が、今世紀に入りあまり進んでいないことからすると、改めて再検討する時期に来ている。

長江中流域の様相

長江中流域で形成された稲作栽培体系が、周辺地域

にどのように伝播したか。とくに華南地域に今回は、主にこれまで注目されなかった湘江中上流域の様相を調べることにした。湘江水系は、広東と湖南の境界の嶺南山地を水源として北流し湘潭盆地を抜け、多くの支流は長沙で湘江の本流へ集まり洞庭湖にそそぐ。逆に、洞庭湖方面から南下する場合には、この湘江水系を遡上し、嶺南山地を越えると広東や広西に入ることができる。現在でも広州へ向かう幹線道路は長沙からこのルートを通る。洞庭湖の西側周辺に展開した湯家崗文化や大溪文化と広東地域との相互交流が、土器から論じられている（西谷 1997）ように、新石器時代の早い段階から、長江中流域と華南との関係はあったと考えられている。こうしたことを考慮すると、長江中流域で形成された稲作栽培体系もまた華南地域へ伝播した可能性も考えられる。こうした問題意識から、まずは湖南省文物考古研究所を中心に、湘江流域の考古学の成果を調べた。

長沙より南の湘江中上流域（湘潭盆地）の考古学調査はほとんど進んでおらず、新石器時代の基本的文化編年はまだ確立していない（尹検順 1999）。現状では、湖南省文物考古研究所が湘潭県堆子嶺遺跡、湘郷市岱子坪遺跡、平江県舵上坪遺跡など数か所の遺跡を調査されているのみである。堆子嶺遺跡は大溪文化期に併行し、その文化は本遺跡を標識にして堆子嶺文化と呼ばれている。堆子嶺文化に後続するのは、岱子坪遺跡の第一期文化遺存を標識にした岱子坪一期文化である。屈家嶺文化期に併行し、その屈家嶺文化や江西省の贛江流域の文化の影響を受けているとされている。本遺跡のほか、長沙腰塘遺跡、長沙月亮山遺跡がある。舵上坪遺跡は、石家河文化期に併行し、土器様式の類似から石家河文化の一類型とされている。

大溪文化、屈家嶺文化、石家河文化までの3時期については併行する遺跡が確認されているものの分かっている遺跡はあまりにも少ない。これまでのところ、これら遺跡から出土の石器群には、農耕具とされるものは、まだ出土していないことがわかった。長沙市東側の瀏陽県樟樹塘遺跡では石家河文化併行期の文化層より長方形石包丁が出土しており、石家河文化期では湘潭盆地に入る手前までは長江中流域系の稲作がおこなわれていた可能性がある。現状においては長江中流域の各文化との関係や影響は若干認められるものの、中流域の稲作栽培体系が本格的に伝播・拡大するのは新石器時代後期末以降と考えられる。

長江中流域から華南へのルートはもう一つある。湘

江水系の西側に位置する沅水水系である。貴州省から北上して湖南省懷化市を抜け、洞庭湖にそそぐ。途中に大きな平原や盆地はないが、主要な南北ルートである。ルート上の懷化市高廟遺跡では近年発掘調査が行われ、内陸性の貝塚遺跡であることがわかっている。彭頭山文化期に併行する（湖南省文物考古研究所 2000）。動物骨や魚骨のほか、大量の石斧とその未成品が出土しているものの、農耕関連遺物は一切出土していない。プラントオパールを分析中とのことであるが、イネ種子や籾殻などは見つかっていない。このことから、すでに稲作を行っていたとされる彭頭山文化に対して、異なる生業類型つまり河川漁撈に依拠した生業をもつ高廟文化として認識されている。湖南省文物考古研究所では、この高廟遺跡出土資料のほか、沅水のさらに上流の靖州県斗篷坡遺跡の資料が収蔵されている。この遺跡の石器群のなかに、長江中流域に特徴的な打製石鋤（クワ）が出土している。時期は石家河文化期に併行する。今回は十分な資料の閲覧や現地調査ができなかったが、前述の樟樹塘遺跡同様、石家河文化期に多少周辺地域にも長江中流域系の稲作関連遺物が拡がったのかもしれない。ただし、石家河文化に見られるような城壁を持つ遺跡や大規模な集落遺跡はいまだ見つかっておらず、石家河文化に存在した稲作技術体系がそのまま伝播したとは考えにくい。湘江流域、沅水流域ともに、今後の発掘調査による資料の増加が待たれる。

長江上流域（四川盆地）の様相

四川では、近年青銅器時代の三星堆遺跡や金沙遺跡の発見に代表されるように、紀元前2千年紀では極めて独自の地域社会が存在したことが明らかになっている。これに対して、新石器時代では実のところ研究がほとんど進んでいない。前世紀末ごろには、成都市郊外の宝墩遺跡や郫県古城などの大型城壁集落が発見されたものの、前述の三星堆遺跡や金沙遺跡の発見に加えて、三峡ダム建設など経済発展に伴う緊急調査が増加し、こうした新石器時代を代表する遺跡の調査を本格的に着手することができなかった。近年は、国家文物局の指導もあって、成都市が中心となり調査体制を整えているとのことである。訪問期間中は、幸いにも宝墩遺跡や郫県古城を見学することができたが、出土遺物は調査中でもあり整理が進んでおらず詳細を知ることができなかった。実際、宝墩遺跡の新石器時代文化遺存の由来については、在来文化に長江中流域

の石家河文化からの影響を認める意見や陝西・甘粛など北からの影響を指摘する意見が聞かれるものの、出土資料をもとにした本格的な研究段階には至っていない。ただし、四川盆地でも農耕を営んでいたことは確実に、今後は、「四川盆地」の農耕起源の問題も取り組んでいくことが望まれる。新石器時代後期から青銅器時代の四川盆地は、現在よりも気温が高かったことが分かっており、将来的には初期稲作の形成地のひとつとしてとらえておくことが重要である。また、黄河上流域との地域社会と接していることから、稲作・粟作といった単純な農耕区分ではない生業類型を想定しておくことも必要であろう。

現状では、三峡ダム建設に伴う発掘調査により、重慶地区から多くの新石器時代遺跡が調査されたことで『長江三峡工程文物保護項目報告』としてすでに多くの発掘調査報告書が刊行されている。むしろ重慶地域のほうで研究が進んでいる（白 2010）が、土器を中心とした考古学的文化の整理と編年が目下の研究段階である。

4. 討論と今後の課題

長江下流域と中流域の稲作栽培体系の比較

筆者は、新石器時代における長江流域の各地域は、同じ稲作を行う生業であっても、農耕具の組成やそれらの出現過程は異なることを以前に論じたことがある

（楨林 2008）。次の課題として各農耕具の起源と展開に関わる研究を掲げていた。例えば、長江下流域と中流域の収穫具である石包丁は、相互に関係するものか、それとも由来元が異なるのかを実証的に明らかにしなければならない。そのことが多元的な稲作栽培体系の解明につながると考え、今回も各博物館等の資料を実見した。下流域と中流域とは、独自の農耕具と技術が形成されたことは間違いない。しかし、より実証的に明らかにしようとする場合、下流域ならば良渚文化以降の広富林文化、馬橋文化、そして湖熟文化の農耕具、中流域ならば石家河文化以降の農耕具もあわせて分析しなければならない。とくに新石器時代後期では、同じ機能をもつ遺物、例えば直角鎌などが両地域で出土しており、それらの消長を正確に整理しておきたい。むしろ、新石器時代後期に限らず、稲作初現期でも同様の比較ができればよいが、これまでの出土資料からはまだ難しいのが現状であろう。

各稲作栽培体系の伝播と地域社会の展開をめぐって

これまでの研究では、稲遺存体の出土分布が時期を経るに従い黄河流域や華南に拡がることから、稲作もまた長江流域を中心として周囲に拡大すると考えられている（嚴 1997）。また、稲作に関わる道具や長江流域の文化（例えば、良渚文化）の土器も周辺地域に出土することから、稲作の拡大論を補強してきた。しかし、稲作とその文化は、耕作から収穫まで、さらには

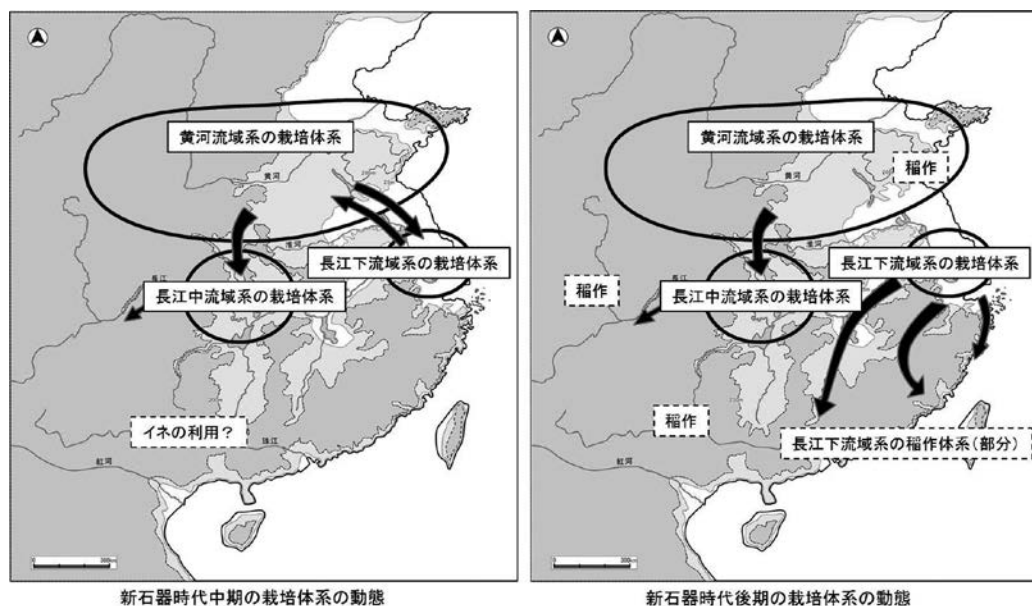


図3 長江中下流域系の各栽培体系の伝播・拡散（楨林 2013）

食するまで一連の過程であり、かつ体系的なものである（槇林 2008）。よって、稲作技術の伝播と前述の稲遺存体の出土分布の拡大とは別に考えなければならない。こうした観点から、長江流域以南を調査した。長江下流域系の栽培体系の伝播を浙江省南部の衢州市博物館や龍游県博物館、さらに温州市博物館や福建省博物館の資料から、そして長江中流域系の栽培体系の伝播を湖南省文物考古研究所の湘江流域の資料から検討した。また、深圳市咸頭嶺遺跡、香港市大湾遺跡、同市深湾遺跡などの資料とも比較を行った。いずれの資料においても、新石器時代後期までに長江下流域や中流域で成立したとされる稲作栽培体系と同一もしくは類似した農耕具は確認できなかった。ただし、福建省曇石山遺跡では直角鎌が出土しており、影響はあったことは肯定できる。しかし、体系化された農耕具全部が伝播し周辺地域に定着したとは現状認められないのである（槇林 2013）（図 3）。今後は、江西省・湖南省と広東省・広西省の境界付近、たとえば石峡文化の石器群を調査し検証したい。

新石器時代後期に成立した稲作栽培体系は、紀元前 2 千年前後に良渚文化や石家河文化とともに衰退する。広東・広西地域でも確立した栽培体系を見ることはなかった。しかし周知のように、後世、灌漑水田稲作は中国だけでなく東南アジアや朝鮮半島南部・日本列島へと広く普及していく。新石器時代後期末の一時、衰退した稲作栽培体系がその後社会生業基盤として如何に再び成立したのかも検討することで、多元的な稲作地域社会の形成史を復元することができよう。

引用文献・参考文献

- 尹検順 1999 「湘江流域原子文化初論」『南方文物』1999 年 4 期
 嚴文明 1997 「稲作起源研究の新進展」『考古』1997 年 9 期
 向桃初 2008 『湘江流域商周青銅文化研究』線装書局
 湖南省文物考古研究所 2000 「黔陽高廟遺址発掘簡報」『文物』2000 年 4 期
 小柳美樹 1997 「石犁・破土器・耘田器」『日本中国考古学会会報』第 7 号
 後藤雅彦 2011 「先史東南中国における稲作農耕の再検討」『地理歴史人類学論集』2
 浙江省文物考古研究所 2005 『南河浜—崧沢文化遺址発掘報告』文物出版社
 浙江省文物考古研究所 2009 『浙江考古新紀元』科学出版社
 寺沢薫 1995 「中国古代収穫具の基礎的研究」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』佐賀大学
 西谷大 1997 「中国東南沿岸部の新石器時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 70 集

- 白九江 2010 『重慶地区の新石器文化 - 以三峡地区為中心 -』巴蜀書院
 原田幹 2011 「「耘田器」の使用痕分析—良渚文化における石製農具の機能—」『古代文化』第 63 巻第 1 号 古代学協会
 槇林啓介 2007 「収穫具から見た中国新石器時代の農耕文化の変容」『日本中国考古学会第 17 回大会予稿集』日本中国考古学会
 槇林啓介 2008 「中国新石器時代における農耕文化の形成と変容—黄河・長江流域における農耕具・加工調理具を中心に—」『東アジアの文化構造と日本の展開』北九州中国書店
 槇林啓介 2013 「栽培体系の形成と伝播・拡散から見た先史中国の稲作と地域社会」『東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史（国際常民文化研究叢書 第 3 巻）』国際常民文化研究機構